

変わりゆくポーランド、 変わらぬポーランド

～日本ポーランド協会
関西センターの活動から～



藤井 和夫

ご承知のように、最近のポーランドは大きく変わりつつあります。今年(2014年)は、1989年の体制転換から25周年、NATO加盟から15周年、EU加盟から10周年という記念の年ですが、ポーランドはまさに激動の四半世紀を過ごしてきました。皆様の北海道ポーランド文化協会と同様に、日本ポーランド協会関西センターもずいぶん昔から活動してきましたので、この激動のポーランドとともに長い時間を共有してきたこととなります。

関西センターは、1970年代から民間の国際友好団体として発足した日本ポーランド協会のいくつか存在した支部(センター)のひとつとして誕生しました。当時はポーランドの政治情勢が世界中の注目を集めていて、1980年前後の自主管理労組「連帯」の動きやその後の「戒厳令」、1989年の「円卓会議」に続く初の自由選挙をきっかけとする社会主義政権の崩壊など、日本でもポーランドのできごとがニュースのトップを飾ることも多い時代でした。

しかしながら、1989年に体制転換して以降「ショック療法」が移行期の経済改革として注目されたあとは、なぜか日本のマスコミがポーランドのニュースを取り上げることは目に見えて減っていきました。ポーラ

ふじい かずお

1950年、兵庫県生まれ。関西学院大学経済学部卒、同大学院修了(経済学博士)。1978～80年ポーランドに留学。現在、同大学経済学部教授。専門はポーランド経済史・経営史。日本ポーランド協会関西センター代表。

ンド国内では不安定な政治と低迷する経済を安定したものにさせるための試行錯誤が文字通り必死で行われていたのに、日本にはポーランドの情勢がほとんど伝わってこない状況だったのです。

ちょうどその頃、日本ポーランド協会の東京本部が活動を停止し、各地域センターがそれぞれ独立して活動を継続することになりました。もともと日本ポーランド協会は「日本とポーランドの両国民の間の相互理解と友好親善に寄与することを目的とする」(規約より)民間の団体でした。関西センターはその目的をそのまま引き継ぎ、名称も(いろいろ議論はしましたが)以前の長つたらしい名前を今も使っています。会員はポーランドに関心を持つ多様な人々、大学や高校の先生、ポーランドに留学した経験を持つピアニスト、会社員、主婦、学生などからなり、1990年代から倍以上に増えて、現在の会員数は約120人になります。

関西センターが独立した活動を始めた時期が日本にポーランドのニュースがあまり伝えられなくなった頃でしたので、文化や社会を中心ととにかくポーランドのことを日本の皆さんに知っていただくことが、活動の一つの基本方針となりました。一例が数年おきに開いたシンポジウムで、1999年には「移行期ポーランドの光と陰」として体制転換から10年間の動きを紹介し、2002年には「ポーランドの貴族とその社会」という題で旧社会主義時代にはあまり注目されなかったポ



写真1 総会風景

ーランドの貴族社会とその文化を紹介し、2003 年には「第 2 次世界大戦とポーランド」でポーランドがいかに第 2 次大戦と深い関係があるかをその多様な側面とともに紹介し、2007 年には「EU 加盟後のポーランド」と題して、ポーランドと EU の文化的・経済的なつながりや加盟後の国内政治の動向を紹介しました。

実はシンポジウムはその後途絶えています。休眠には、企画や準備の余裕がなくなったこと以外にも理由があります。その一つは、一部の会員から「シンポジウムのテーマが暗すぎる」「話が難しすぎる」という声があがったことです。関西センターの特徴の一つは、ポーランドの専門家や研究者ではない会員の数が多く、それらの人々への情報の提供や交流を大切にしていることで、シンポジウムのテーマや内容が少し専門的になりすぎていたかと反省したわけです。さらに「ポーランドについて暗い話が多い」という指摘は、もっとも気になる点でした。「明るく、楽しく、美しいポーランドを紹介したい」というのは、大使館や観光局だけではなく、ポーランドの人々、そして私たちの願いでもあります。

それに、専門研究者によるポーランドの紹介は、その人のポーランド像が変化していないことがままあります。私がおの典型で、今年の初夏に 1978 年の留学以来長いつきあいのウッジの町を訪れ、腰を抜かすほどびっくりしました。ワルシャワや他の町にどんどんビルが建っても、ウッジは昔と変わらぬ姿の中に 19 世紀の産業的繁栄の栄光を見いだすだけの、時代に取り残されていく町、そう思い込んでいたのですが、その雰囲気象徴であったウッジ・ファブリチュナ駅周辺で 100 ヘクタールにわたる大規模再開発が始ま

り、地下駅の大工事の横にはすでにSF映画の未来都市のようなビルが一部にできあがっているのです。

今やインターネットの時代で、ポーランドについての新しい情報もどんどん提供されています。日本からポーランドへの旅行者も大幅に増え、メディアでも「明るく、楽しく、美しいポーランド」の情報があふれています。今は、「変わらぬポーランド」の情報発信がもつ別の意味を考えるべき時なのでしょう。

2002 年と 2006 年に関西センターで企画したポーランド旅行や、2003 年から始めたポーランド人留学生への支援活動も、変わりゆくポーランドを実感する機会となりました。留学生にはささやかな補助の代わりに、講演や隔週のポーランド語勉強会で講師役を行ってもらい、多様なテーマの彼らの話が、今時の変わりゆくポーランドそのままなのです。

関西センターは、「変わりゆくポーランド」を伝えるつもりで「変わらぬポーランド」を発信しないように気をつけながら、定番の料理講習会=写真2=やコンサート=写真3=を会員の協力で盛り上げ、編集者の努力で多彩な記事を集める会報誌『関西版ヴィスワ』をより充実させ、これからも時代に意味を持つ企画をたてていきたいと考えています。さらに「変わりゆくポーランド」に対して「変わらない関西センター」にならないように、組織の若返りも考えています。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

日本ポーランド協会関西センター関連サイト

<http://www.eonet.ne.jp/~nippo-kansai/>
<http://nippokansai.blog.fc2.com/>



写真 2 料理講習会



写真 3 コンサート

藤井先生ご一家には、私どもが 1994-95 年に(阪神・淡路大震災のときでした)ワルシャワで暮らした折り、日本人学校などでたいへんお世話になりました。そのご縁で、今回関西での活動についてご寄稿いただきました。(安藤厚)